

# 教学マネジメントのための卒業生調査

東京薬科大学

平野俊彦・宇治原忠男

## 1 はじめに

大学教育再生加速プログラムテーマV「卒業時における質保証の取組の強化」に採択された東京薬科大学の取組の一つに「卒業生調査」がある。本調査は、卒業生約1万8千人を対象に行われ、有効回答数5,077件、回収率28.6%という他大学ではみられない本格的な大規模調査となっている。また、わが国最大規模を誇る薬学部とわが国初の生命科学部を有する本学の卒業生調査は、他大学にとっても有効なベンチマークになると考えている。本稿では、教学マネジメントに役立てることを目的として、調査結果を編集した事例を紹介する。

## 2 調査の概要

本学卒業生（1971年3月～2017年3月卒業生）を対象とする質問紙調査（卒業生調査）を実施した。本調査は、東京薬科大学での学生生活が、入学前の学修習慣からどのような影響を受け、卒業生にとっての現在のキャリアや暮らし、さらには現在の知識や能力の水準に対してどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするために設計されている。

## 3 分析結果

### （1）カリキュラムの改善

薬学部では、社会人として必要な知識能力と卒業生が実際に身につけている知識能力の関係が一致し、本学が定める卒業コンピテンスが有効に機能していることが判明した。在学生へのコンピテンス調査においても、年次が上がるごとに効用を上げていることが確認できている。一方、教育プログラムの評価において、語学教育への課題が浮き彫りとなった。この結果を受け、薬学部では、外国語学習プログラムを新規に開設。生命科学部でも、評価結果を受け、2020年度よりデータサイエンス・国際化・アントレプレナーを柱とした知識集約型社会を支える教育プログラムを始動させる。

### （2）卒業論文研究の形成評価とディプロマ・サプリメントによる視覚化

卒業論文研究は、わが国の理系教育の要であり、社会において活躍するための知識・技能・態度を育む重要な教育プログラムだとされている。卒業生調査においても、卒業論文研究が、専門知識の深い理解のみならず、教養的知識から社会的スキルまで、幅の広い複合的な効用をもたらしていることが明らかになった。本学では、卒業論文研究にルーブリックを用いた形成評価を導入し、学修成果を可視化することにも取り組んでいるが、その取組が、卒業生の質保証向上に果たす重要性を改めて確認した。

### （3）教学情報の共有化—教師と学生の相互理解を深めるために—

(1)、(2)の紹介事例にみるように、卒業生調査は、大学教育の評価を測定し、エビデンスに基づき教学マネジメントのPDCAサイクルを回すための有効的なツールとなりうる。このサイクルを更に有効に活用するためには、在学生向け、教員向け等、個別にエビデンスを編集し、教学情報を共有化していくことが必要だろう。